

名前 () 日づけ (/) できた数 (/28)

使い方 本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。この話の山は「そ・なむ→連体形」「こそ→已然形」の係り結び、助動詞「まじ・けむ・べし」、そして「言葉はちがっても人の心は同じ」という主題です。

あらすじ＝土佐から京へ帰る船旅の途中、海の上で夜を過ごしていると、山の端もない海の中から二十日の月がのぼった。それを見た作者は、昔、唐から帰ろうとした阿倍仲麻呂の話思い出す。送別の宴が名残惜しく長引き、海から出る月を見た仲麻呂は「青海原ふりさけ見れば…」と、故郷の三笠の山の月を思う歌をよんだ。言葉の通じないはずの唐の人々も、漢字で書いて意味を伝えてもらおうと深く感心したという。作者は「月の光が同じなら、人の心も同じなのだろう」と思いをめぐらせ、その昔をしのんで「都にて山の端に見し月なれど…」の歌をよむ。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

二十日（はつか）の夜の月出でにけり。①山の端もなく、海の中よりぞ②出で来（く）る。③かうやうなるを見てや、昔、阿倍仲麻呂（あべのなかまろ）といひける人は、唐土（もろこし）に渡りて、帰り来（き）ける時に、船に乗るべき所にて、かの国人（くにびと）、④馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。

⑤飽（あ）かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は、⑥海よりぞ出でける。これを見てぞ、⑦仲麻呂の主（ぬし）、「わが国に、かかる歌をなむ、神代（かみよ）より⑧神も詠（よ）ん給（た）び、今は上（かみ）・中（なか）・下（しも）の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びもあり、悲しみもある時には詠む」とて詠めりける歌、

青海原（あをうなばら）⑨ふりさけ見れば春日（かすが）なる⑩三笠（みかさ）の山に出でし月かも

とぞ詠めりける。かの国人、⑪聞き知るまじく思ほえたれども、言（こと）の心を、男文字（をとこもじ）に、さまを書き出だして、ここの言葉伝へたる人に言ひ知らせければ、⑫心をや聞き得たりけむ、いと思ひのほか⑬なむ愛（め）でける。唐土（この国）とは、言（こと）異なるものなれど、⑭月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて、今、そのかみを思ひやりて、ある人の詠める歌、

都にて山の端に見し月なれど波より出でて⑮波にこそ入れ

語注 山の端＝山と空との境目。ふつう月はここから出る。かうやうなる＝このような。海から月がのぼるさまをいう。唐土＝中国。馬のはなむけ＝旅立つ人を送る送別の宴・饗別。飽かず＝満足しない。名残惜しい。主＝人を敬つていう言い方。「どの」。神代＝神々の時代。上・中・下の人＝身分の高い人・中くらいの人・低い人。ふりさけ見る＝はるか遠くを仰ぎ見る。春日・三笠の山＝今の奈良市にある地名と山。仲麻呂の故郷にあたる。思ほゆ＝自然と思われる。男文字＝漢字。かな文字は「女手（をんなで）」という。愛づ＝ほめる。感心する。影＝光。そのかみ＝その昔。当時。※阿倍仲麻呂＝奈良時代に遣唐使の一行に加わって唐に渡った留学生。唐の朝廷で高い位についたが、帰国の船が流されるなどして日本に帰れず、唐で一生を終えた。

A 語句の意味と読み (1～6)

- (1) ① 「山の端もなくて」の「山の端」の意味を書け。
[]
- (2) ④ 「馬のはなむけ」の読みと意味を書け。
[]
- (3) ⑤ 「飽(あ) かずやありけむ」の「飽かず」の意味を書け。
[]
- (4) ⑨ 「ふりさけ見れば」の「ふりさけ見る」の意味を書け。
[]
- (5) ⑬ 「なむ愛(め) できる」の「愛づ」の意味を書け。
[]
- (6) ⑭ 「月の影は同じことなるべければ」の「影」の意味を書け。
[]

B 文法 (7～13)

- (7) ⑤ 「飽(あ) かずやありけむ」の「けむ」の文法的意味と活用形を書け。
[]
- (8) ⑥ 「海よりぞ出でける」の「ぞ」の働きを答え、結びの語とその活用形も書け。
[]
- (9) ⑩ 「三笠(みかさ) の山に出でし月かも」の「し」は何の助動詞の何形か。また「かも」の種類と意味も書け。
[]
- (10) ⑪ 「聞き知るまじく」の「まじ」の文法的意味を書け。
[]
- (11) ⑬ 「なむ愛(め) できる」の「なむ」が係助詞だと判断できる決め手を二つ書け。
[]
- (12) ⑭ 「月の影は同じことなるべければ」の「べけれ」の文法的意味と活用形を書け。
[]
- (13) ⑮ 「波にこそ入れ」の「入れ」の活用形を答え、そうなる理由も書け。
[]

C 主語・指す内容・敬意の方向 (14～17)

(14) ②「出で来(く)る」の主語にあたるものを、本文中から抜き出して書け。

(15) ③「かうやうなる」は、どのようなようすを指しているか。本文に即して書け。

(16) ⑧「神も詠(よ)ん給(た)び」の「給ぶ」は、誰から誰への敬意を表しているか。

(17) ⑫「心をや聞き得たりけむ」で、歌の心を「聞き得」たのは誰か。

D 口語訳 (18～21)

(18) ⑧をふくむ「わが国に、かかる歌をなむ、神代(かみよ)より神も詠(よ)ん給(た)び」を口語訳せよ。

(19) ⑨・⑩をふくむ和歌「青海原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」を口語訳せよ。

(20) ⑪をふくむ「かの国人、聞き知るまじく思ほえたれども」を口語訳せよ。

(21) ⑮をふくむ和歌「都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ」を口語訳せよ。

E 内容・記述 (22～25)

(22) ①「山の端もなく」とあるが、土佐から京へ帰る船旅の途中で海の上にいる作者たちに「山の端」が見えないのはなぜか。月がどこから出ているかにふれて書け。

(23) ⑦「仲麻呂の主（ぬし）」が和歌をよむことになったきっかけは何か。本文に即して書け。

(24) ⑬「なむ愛（め）でける」とあるが、言葉の通じないはずの唐の人々が仲麻呂の歌をほめたたえたのはなぜか。歌の心が伝わった道すじにふれて書け。

(25) ⑭のあとに「人の心も同じことにやあらむ」とある。ここで作者が言おうとしていることを書け。

F 文学史（本文全体をふまえて答える）(26～28)

(26) この文章の出典『土佐日記』の作者名と、どのような旅を書いた日記かを書け。

(27) ⑨・⑩をふくむ和歌「青海原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」は、『古今和歌集』や百人一首にも収められているが、そこでは初句が何となっているか書け。

(28) ⑦「仲麻呂の主（ぬし）」の阿倍仲麻呂とはどのような人物か。簡単に書け。

【テスト直前チェック】この三つ ①「ぞ・なむ」は連体形、「こそ」は已然形。⑥「出でける」⑬「愛でける」は連体形、⑮「入れ」は已然形。結びの語と活用形をセットで答えられるようにしておく。②「影」は「光」。⑭「月の影」を現代語の「かげ（暗い部分）」で訳すと即アウト。「月の光」と訳す。③主題は「望郷」＋「人の心も同じ」の二本立て。記述の答えは⑭～⑮のあたりに集まります。片方だけだと減点されやすい。